「試練の時の支え―試練と挫折を越えて」

ルカ 22:31-34

2021.1.3　南与力町教会朝拝

序：主のもとに召された岡兄を偲びつつ

2021 年という新しい年を迎えました。そして新年の初めての礼拝に私たちは集っています。このように主にある兄弟姉妹が共に礼拝に集うことのできる恵みを覚えたいと思います。

コロナのことで礼拝に集うことのできない方々がおられます。そして昨日、敬愛する岡數太兄弟が天に召されました。突然の事でした。元気に囲碁の会に出かけられたそうです。そしてその会に出る前に近くの銭湯によられたそうです。銭湯には体の調子がよくなるということでよく行かれていたそうです。昨日、岡さんが銭湯に行かれた時には、中に誰もいなかったようで、岡さんはお風呂の中で倒れているのを発見されたということです。日赤病院に救急搬送され、処置をされ、人工呼吸をつけ、一時は息が戻ることもあったようですが、心臓の状態が悪く、昨日の午後 1 時 40 分頃息を引き取られたということです。心臓の大動脈解離が原因でした。ほとんど苦しまれなかっただろうと聞いております。

本当に突然のことで、ショックの大きなことです。すべては神様のご計画の中で起こっているとは思いつつ、やはり私たちにとっては深い悲しみをもたらす出来事です。葬儀はご本人の意向によって近親者のみで行われますことをご理解ください。あまりに突然のことで、すぐには受け止め切れないようなことでもありますが、今、岡數太さんの霊魂は主イエス・キリストのみもとへと上げられ、今はすべての労苦から解かれて、御国で安らぎを得ていることを信じたいと思います（黙示 14:13）。そして地上に残されている私たちは、今朝もまた主イエスの御言葉に耳を傾けましょう。

１．サタンによる試み―神の許しの中で

最後の晩餐の席において、イエス様は弟子のペトロに呼びかけて言われました。

「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。」

福音書記者ルカは、イエス様の受難の時を、サタンが活動する時として描いています。イエス様を裏切ったユダの中には「サタンが入った」と 22 章 3 節では言われていました。そして今日のところでは、そのサタンがペトロをはじめとする他の弟子たちをも「小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた」と言われています。この描写は先ほど読んでいいただきましたヨブ記の 1 章、2 章を思い起こさせるものです。そこでもサタンが信仰深いヨブを試みに遭わせようと神に許可を求めます。それと同じようにここでもサタンはペトロたちを「小麦のようにふるいにかけること」、すなわち彼らを試みることを神に願うのです。

私たちは人生において様々な試練に遭います。今のコロナウイルスのことも一つの試練かもしれません。また愛する者の死は私たちの心が揺さぶられる大きな試練だと思います。イエス様はもうすぐ捕らえられ、十字架につけられて無残な仕方で殺されることになります。それはペトロのはじめとする弟子たちにとって大きな信仰の試練でした。それが「小麦のようにふるいにかける」と表現されています。小麦は箕という道具を使ってふるいにかけられます。箕で小麦をすくい、それを上に放り投げます。そ

うすると軽いもみ殻は風で飛ばされ、実の詰まった小麦だけが下に落ちてきます。それを繰り返すことで小麦ともみ殻とはより分けることができます。「小麦をふるいにかける」とはそういうことです。それはすなわち弟子たちの信仰が本物かどうかを試すための試練です。そしてサタンは彼らが「もみ殻」に過ぎないこと、その信仰は偽物であることを証明したいのです。私たちもそのようなサタンの試み遭うことがあります。しかしそのようなサタンの試みが神の許可なしにはできないことを覚えたいと思います。だからサタンは神に願うのです。サタンが好き勝手に何でもできるわけではありません。ただ神様が許される範囲の中でのみサタンの試みも行われるのです。

２．イエス様の祈りによって支えられる信仰

　それに続いてイエス様は次のように言われました。32 節

「しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

　「わたしが」という言葉が強調されています。サタンはあなたがたがを小麦のようにふるいにかけることを願ったが、「しかしわたしは、あなたのために祈った」と強調されているわけです。ではイエス様が祈ったこととは何でしょうか。弟子たちが試みに遭わないことでしょうか。そうではありません。試みや試練には遭うのです。しかしその中でも「あなたの信仰が無くならないように」とイエス様は祈られたのです。サタンが弟子たちを試みるのは、最終的に弟子たちがイエス様への信仰を失い、滅ぼされてしまうためです。しかしイエス様はそのようなサタンの目的に対抗して私たちのために祈ってくださいます。私たち一人一人の信仰が試練の中にあっても尽きてしまわないように、消えてしまわないように神様にとりなし祈ってくださるのです。

　そしてイエス様はペトロに続けて言われました。

「だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

　この文章では「あなたは」という言葉が強調されています。「わたしはあなたのために、あなたの信仰が無くならないように祈った。だからあなたも、立ち直ったなら、あなたの兄弟たちを力づけてやりなさい。兄弟たちを支え、強めてあげなさい」。

　このようにイエス様はペトロが立ち直った後の働きについてここで命じておられるのです。しかしこの言葉を聞いたペトロは次のように答えました。33 節

「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」

　イエス様の「立ち直ったら、立ち帰ったら」という言葉には、一度はペトロがつまずき、倒れてしまうこと、イエス様から離れてしまうことが前提とされています。しかしペトロはそれに対して「いや、待ってください、イエス様。私は牢獄であろうと、死であろうと、あなたと一緒に赴く覚悟ができているのです」と答え、いわば抗議をしたわけです。「私はそもそもあなたから離れることなどあり得ません、ずっと一緒にいます」と。

　イエス様は答えて言われました。

「ペトロ、言っておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」

　この時は最後の晩餐を食べた後であり、夜になっていました。そして朝方になれば鶏が鳴き声を上げます。しかしイエス様はペトロに対し、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言う

だろう。わたしを知っていることを三度も否定することになる」このように言われたのです。
　先ほどは「シモン、シモン」と呼びかけられていたのに対し、ここでは「ペトロ」と呼びかけられています。「ペトロ」とはイエス様が名付けられた名であり（ルカ 6:14）、「岩」という意味があります。しかしこの時のペトロには、岩のように堅く揺り動かされない人物ではありませんでした。この後、ペトロはイエス様から言われた通り、鶏が鳴く前に三度、イエス様を知らないと言ってしまう、イエス様と自分との関係を否定してしまうのです（22:54-62）。ペトロは自分はそんなことをしない、と思っていたでしょう。「私は牢獄であろうと、死であろうと、あなたと共に行く覚悟ができている、準備ができている」そのようにペトロは自信を持って言っていたのです。しかしイエス様はペトロ本人以上にペトロのことを、ペトロの弱さをよく知っておられました。ペトロが今夜三度もご自分を否んでしまうこと、そのようにしてペトロがつまずき、倒れてしまうことをイエス様だけはご存知でした。しかしイエス様はここでそういう弱いペトロを叱りつけ、「そのようなお前は弟子失格だ」と言われるのではないのです。そうではなく、イエス様はだからこそ「私はあなたのために祈った。あなたが試練と挫折の中でも、信仰を失ってしまわないように神にとりなし祈った。だから、立ち直ったその時にはあなたの兄弟を力づけてやりなさい」そのように言われたのです。
　ヘブライ人への手紙 2 章 17 節～18 節には次のようにあります。お聞きください。
「それで、イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです。事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることがおできになるのです。」
また同じヘブライ人への手紙 4 章 15 節では
「この大祭司は、わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。」と言われています。

　イエス様は私たちと同様に試練に遭われました。そのことはルカ 22 章 28 節で「あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた」と言われていることからも明らかです。そしてイエス様はご自分が試練を受け苦しまれたからこそ、試練を受けている私たちを助けてくださる。そして試練の中でつまずき、挫折してしまうような私たちの弱さに同情してくださる、憐れみ深い大祭司なのです。イエス様は今も天の父なる神様の右の座において私たちのためにとりなし祈ってくださっています（ローマ 8:34）。私たちにとってこれほど心強く、感謝なことはありません。

３．試練の意味とその後の働きへの召し

　ペトロもサタンの試みの中で三度もイエス様のことを知らないと言ってしまいますが、イエス様の祈りによって支えられ、信仰を失わずに済んだのです。そして信仰が残っていたからこそ、ペトロはイエス様のもとに立ち帰ることができました。復活したイエス様に出会いペトロは立ち直りました。そしてペトロはその後、イエス様から言われた通り、兄弟たち、すなわち教会の兄弟姉妹たちを力づけ、強めるための働きをしていくようになったのです。そのことは使徒言行録に記されています。ペトロはイエス様のことを宣べ伝えたがゆえに、何度も牢に入れられ、権威者たちから脅され、殺されそうになることもありません。しかしその時のペトロはもう動じることはありませんでした。大胆にイエス様の復活

を証しし、イエス様によってこそ人は救われるということを語り続けたのでした。ペトロの信仰は、試練と挫折を通して練り清められ、より堅固なものとされたと言えます(ペトロの手紙第一１章６～７節)

敬愛する岡數太さんは信仰の生涯を全うし、主のもとに召されていきました。ある長老さんが昨日、次のようなメールをくださいました。
「岡さんには学生時代から今日まで、信仰の先輩として、多くのご指導をいただき、特に長老の働きに関して様々なご指導、アドバイスをいただきました。今でも、長老としてどう処するべくか判断に迷うときはご意見、アドバイスをいただく拠りどころととさせていただいておりましたのでショックです。何よりも信徒として、ぶれるところのない信仰生活は素晴らしい先輩でした。」

「ぶれるところのない信仰生活」、岡兄はそれを身をもって示してくださった信仰の先輩でした。またわたしも牧師として岡さんの言葉から励ましをいただくことがありました。しかし岡さんのそのような信仰も最初からぶれることのない、堅固なものだったのではないのだと思います。岡さんは南与力町教会の 70 周年記念誌に文章を寄せてくださっています。一部を引用し、読ませていただきます。
「私は大学卒業後、清和で５年ほど教員をしました。銀行からは採用内定の通知をもらっていたし、公務員試験にも合格していたのに、それらを振って清和に入学したのはそれなりの召命感があったからです。」
ここに出てくる「それなりの召命感」がどういうものであったのか詳しくはわかりません。しかし岡兄は愛誦聖句に「地の塩」と書いておられ、それが「信仰・受洗を決断させてくれた聖句」と説明されています。それゆえ岡兄が銀行でもなく、公務員でもなく、清和を選ばれたのはそこで「地の塩」といして働いていこうという召命感があったのではないでしょうか。しかし岡兄は５年ほどで清和を辞められることになります。その理由については次のように記されています。
「先日、清和の卒業生が相談があるとかで、ご主人と一緒に訪ねてくださいました。いろいろお話を伺い説明してあげたところ理解が深まり納得なさったようでした。帰り際に「先生は何故清和を辞められたのですか」と質問なさいました。「その説明には一日かかります」と答えただけで何の話もしませんでした。
説明に一日かかるほど沢山ある理由の中の一つに、私の教師としての倫理観が私が教師にとどまることを赦さなかったというのがあります。初めてクラスを担当したとき、受持ちの生徒の一人が家出をしました。その時はその生徒が帰るまで文字通り食事が喉をこしませんでした。ところが３年も経つと職員会議で生徒の一人が強姦されたという痛ましい報告があっても、校門を出ると普通の生活に帰り、その日の夕食はいつものように食べることができました。それがゆるせなかったのです。私の内心の声が「それでもお前は教師か」と責めるのです。それは何も責められることではなくプロになっていたのですから、自信を持ってよいことなのですが、若い私にはその余裕はありませんでした。
今でこそ経団連の中には、日本の高度成長を支えた終身雇用制度に依存することなく、自由に転職できる社会にしないことには国際競争に勝ち残れないなどとの意見があるようですが、当時は転職はリスクが高く、年功序列型賃金体制のもとでは生涯賃金に大差が生じると言われ、転職者は人生の敗北者、人生の落伍者との烙印を押されかねない時代でした。そんな中で転職を考えるのですから悩みは深いものでした。その時の私の頭の片隅に、松井長老がいました。松井長老は教員を辞したけれども、79 歳で

召されるまで支えられたではないかと。結婚と転職とう私の人生の大きな節目に松井長老は私の横にいてくださったのです。

教会創立70周年にあたり、南与力町教会にはこんな立派な長老さんがいらっしゃったことをお伝えしておきたくて筆を執りました。なお、私の転職を容認し、その準備の期間を支えてくれた妻には今もって感謝しています。それよりも何よりも私に裁判官という仕事を与えてくださった神様に深く感謝しています。」

このような文章を読みますと、岡兄が召命感をもって清和に就職されたにも関わらず、そこを5年で辞められたということは岡兄にとって一つの挫折だったのではないかと思わされます。しかしそこから立ち直り、裁判官として働かれていきました。仕事は変わりましたが、やはり岡兄は「地の塩」として働いていかれたのだと思います。また教会の長老や伝道所の役員として様々な教会で奉仕をされました。そうして教会の牧師や兄弟姉妹たちを励まし、力づける働きをし続けてくださったのだと思います。そのような道のりには奥様の淳子さんの支えがありました。

しかし同時に背後には今日の御言葉で教えらえているようなイエス様の執り成しの祈りがあったことを覚えたいと思うのです。私たちもこれまでに試練や試みがあり、挫折を経験することもあったかもしれません。しかしその中でも信仰を失わずにこれたのは、イエス様が弱い私たちのためにとりなし祈ってくださっていたからです。これからどんな試練があるか私たちには分かりません。しかしすべては神様の御手の中にあります。そしてイエス様が今も私たちのために、私たちが試練の中でも信仰を失われないようにとりなし祈り続けてくださっています。

またイエス様が私たちのために祈り、信仰を支えてくださっているのは、私たち自身の救いのためだけではないことを覚えたいと思います。イエス様はペトロに言われました。「あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」私たちの信仰がイエス様の祈りによって支えられているのは、「立ち直って、兄弟たちを力づける」ためでもあるのです。わたしたちもそれぞれに主にある兄弟姉妹を励まし、支え、力づけるために、イエス様から召されています。私たちも天に召されるその日まで、イエス様の祈りによって支えられつつ、主からの召しに応えて生きていきたいと思います。